

—地域で助け合い、支えあうために—

やがてあなたもお年寄り…… 温かく見守り防ごう孤独死—

●あなたの近所では……
愛ちゃん「お母さん山田のおじいちゃんが今、救急車で運ばれたよ」
お母さん「えっどうして……」

愛ちゃん「近所の人の話では朝家の中で倒れたのを回覧板を持って行って、さつき見つけたんだって」

お母さん「山田のおじいちゃんは3年前におばあちゃんを亡くされて一人暮らしで、最近病気がちだったからねえ」

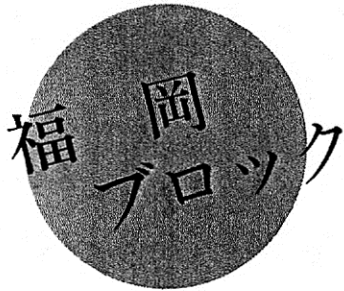
愛ちゃん「一人暮らしのお年寄りは急病のときなどは誰もいないから大変だよ。私達でなにかお手伝いできないのかな？」
(あるケースから)

一人暮らしのお年寄りが一番不安なのは、夜中に発作や急病で倒れ誰にも看取られずに寂しく死んでいくことです。

同じ町内に住み、朝・夕顔を合せる隣近所の誰かが見守り気遣ってくれると感じるだけでも、一人暮らしのお年寄りは安心して生活できるのです。

●このことを踏まえて、筑紫野市においても今後高齢化に伴い地域福祉のネットワーク創りの強化が必要とされてきています。

筑紫野市社協
「ちくしの社協だより」
第26号 平成元年6月15日



星くず

親が子どもと一緒に、教室の一番後ろで机を並べるようになってから四カ月が過ぎました。今という登校拒否症とでもいうのでしょうか。親と一緒にないと学校に来れない。だから当然、親が来れない時は欠席がつづく事になります。

その子は、小学校に入学するまではとても活発で、幼稚園では、先生が留守の時は先生の変わりをするくらい、しっかりした女の子であったといえます。それが、入学と同時に親が事業に失敗。多額の負債を抱えてから、歯車が狂い出したようです。親は内緒にしているつもりでも、子どもというのはとても敏感に事の成り行きを察するものです。「私が学校に行っている間に、二人ともいなくなるんじゃないか」と、子どもなりに心配し、子どもなりに不安な毎日なのでしょう。

クラスの父兄会が何度か開かれ話し合いがもたれましたが、結局、明案はでないままでした。そして、教師一年生の先生もとうとう万策尽きたのでしょうか。ある日、涙を浮かべながら子どもたちにむかって「勉強遅れるかもしれないけど、毎朝、みんなで迎えに行こう」となげかけたといえます。

さて、その事があった次の日から、一人の少女が毎朝、今までよりも一足早く家を出るようになりました。幼稚園から一緒だったというその子は、母親にこう言ったといえます。「わたし、おもうったいね。学校とはんたいほうこうだけど、朝、わたしひとりむかえにいけば、みんなべんきょうおくれなくてすむでしょう——と。」

「〇〇ちゃん、どうして学校に来んしゃれんとかいなね。どうしてか、あなたが聞いてあげれば」と母親。「そんなこと、わたしがきくようなことじゃないもんね。ほんにんがいちばんわかっつとんしゃあと。いつかは、じぶんてかんがえんしゃあよ」と、その女の子。

まだ、親と一緒に登校はできないそうですが、この女の子の意を決した行動が、少しづつ本気で周囲を動かし、いい方向にむかい出したといえます。子どもも、昔の明るさを序々に取り戻しつつあるといえます。父兄が何となく集まって話し合っても、解決への道すら出なかつたのはなぜでしょうか。学校という大きな組織の中での、小さな小さな出来事かもしれませんが、考えるべきは多いものがあるようです。

「過保護」というどうしようもない甘えが子どもにあり、その親にもある事は否めません。学校の取り組み自体にも頭を傾けたくなるのがいっばいですが、今回はそれはさておき、「わたしひとりか……」と言った、ある少女の言葉をもう一度考えながら、今年最後のペンを置きたいと思えます。

よい年をお迎えください。

—若大将—

宇美町「広報うみ」第218号 平成元年12月15日

(社協マスコット) まみちゃんへ

まみちゃん、しゃきょうで、はたらきはじめて、もうすぐ1ねんになるね。

はじめのころは、したばかりむいて、はなしかけても、ちつともへんじがかえつてこない。なんにちも、まみちゃんのごえをきいたことがなかったね。

しゃべれないのかな？ いろいろのかなと、とてもしんばいしたよ。どうしたらまみちゃんのごころのとびらがひろくのかなと、いつもかんがえていました。どうしていいかわからないものだから、まず、わらいかけよう。いつもまみちゃんをみるときは、とびつきりのえがおになろうとおもった。

なんにちもたつて、えがおのへんじがきたときは、むねがきゅーんとなって、なみだがでそうだったよ。

そのとき、てんしのようにみえたよ。
いっしょうけんめいよくはたらくしね。あさはだれよりもはやくきて、みんながくる

ころはもうしごとしてるものね。ずるやすみや、ちこくなんて1かいもないもの。ちようれいのときはみんなと「ぶくし」のおべんきょうもやつてるし、かんしんだね。
おともだちは、「まみちゃんみたいにがんばろう」とたいへんはげみになっているそうね。

まみちゃん、ありがとう。おかげでとてもしごとがたのしいよ。これからもがんばろうね。そしてみんなに「えがおのしあわせ」をちようたいね。

おばちゃんより



春日市社協
「しあわせ」
第57号 一九八九・二

あとがき

昨年、中国、東欧諸国では、自由を求めて民主化要求の波で揺れ、地球は一つの理想の時代を迎えようとしております。

争う事より、共に助けあい豊かな心の人間愛を求め平和な時代になりつつあります。弱き人々に、温かい手を差し伸べる手助けとして、福祉に携わる社協職員は、本年も一生懸命頑張りますので御協力をお願い致します。

編集委員

佐藤 克司
前高 芳郎
高 壽一
高月 薫子
諏訪 潤子

春日市社協
「しあわせ」
第61号 平成2年1月

投稿文より

がん告知に思う

矢野 勉

最近新聞テレビなどでがん告知問題が騒がれたが、人は病気に限らず、不幸なことすべて他人ごとのように思っている。がんにあって初めて「どうして自分が……。」とだれもが思う。もしがんになり先生から

「あなたは〇〇がんです」
 「そうですか、じゃあがんはどのくらい進んでいますか」
 「もう末期であと三か月くらいでしょう」と告知され

「ありがとうございました」と素直に先生と会話が出来ますか？
 いくら知る権利があるといってもこれは過酷であろう。

私は四十九歳の夏がんとセンターの診察室で

「先生がんですか」
 と聞いた。

「別に何かありますか」
 「じゃあがんでしょう」

先進地情報 秋田県の取り組み

昭和六十年以降、宗像市で毎年発生している一人暮らし老人や痴呆性老人の孤独死や事故死は、決して本市だけで発生しているのではありません。高齢化社会の進展に伴い、今や全国的にどこでも開ける事件・事故です。

秋田県では、昭和五十五年から地域ぐるみで進める福祉の街づくり運動として「地域福祉のネットワーク活動」に取り組んでいます。この運動を推進するきっかけになったのは、介護に疲れ果てた娘が、寝たきりの母を線路に横たえ、自分も入水自殺をするという悲惨な事件でした。

秋田県では、こうした問題をひとごととして見すぎず、地域全体の問題として、誰もが安心して暮らせる地域社会を創造しようという姿勢が地域福祉のネットワークづくりにつながりました。

活動内容は、近隣住民、ボランティア、青年会や婦人会等と民生委員・ホームヘルパー・医師・保健婦・施設等の福祉・保健・医療関係者が手を取り合い、役割分担をし、要援護者のより身近な所で日常的に援助活動を展開するものです。

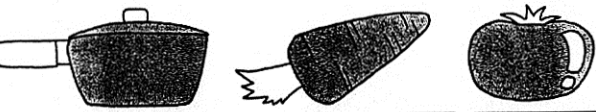
秋田県の活動は、「一人の不幸も見逃さない」ということをモットーに、積極的な活動が展開されています。

本県においても、久留米市や飯塚市において積極的にネットワーク活動が展開されています。宗像市も、今後高齢者の孤独死や事故死を二度と繰返すことのないよう支援活動を拡げ、誰もが安心して暮らせる福祉の里づくりを実現するために、愛のネットワーク活動を強力かつ計画的に推進していくこととしています。

第3回 おじいちゃん料理教室

おじいちゃんの手料理がうまい!!

食は健康の基本



男子厨房に入らずは、もう古い!



おじいちゃんの手料理づくり奮戦記

調理実習のメニューについてはなるべく手間暇かけずに、日常的に、おじいちゃんにも作れるものを……、内容を決定しましたが、日頃料理をしたことのないおじいちゃんたちにとっては、悪戦苦闘の連続でした。

お手伝いしたのが食進会の皆さんで、料理に関する日頃の学習や経験をもちに、やさしくおじいちゃんたちに助言がありました。慣れない手つきで包丁を使ったり、途中失敗を重ねながらも会場は常に楽しく活気に満ちあふれ、苦勞の甲斐ありおいしい料理ができました。

男子厨房に入らずを改善しよう

料理教室は、今後高齢化社会が進行するにつれて、増加する一人暮らしのおじいちゃんの手料理能力の向上を目的に実施しています。しかし、わが国には「男子厨房に入らず」という古い時代の慣習



市社協は、食生活改善推進会(中石伊都子会長。以下「食進会」という)の協力で、第三回おじいちゃん料理教室を六月に中央公民館で開催しました。参加者は、一人暮らしもしくは老夫婦のみの世帯のおじいちゃんが十五人、おばあちゃん三人の計十八人でした。おばあちゃんの参加により、会場はなごやかな雰囲気、笑い声が絶えない料理教室となりました。講師は高田満貴子栄養士で、調理実習の前に、「身体の老化を防ぎましょう」「ストレッチと友達になつて過ごしましょう」「自分のガントックとガントックについて」の講義がありました。お年寄りにもわかりやすい話で、熱心にメモをとったり、質問をするなど健康への強い関心がうかがえました。



が今だ根強く、料理のできない、もしくは料理をしないおじいちゃんがたくさんいます。奥さんとの死別、子供との別居などの理由によって一人暮らしを余儀なくされたおじいちゃんの食生活には、大変な苦勞があります。中には、何か食べていられないというところで、インスタント食品や缶詰を主食にしている人もいます。人の健康は「食」によって支えられています。古き慣習によって、一人暮らしのおじいちゃんが健康な生活を送れないということは、非常に悲しいことです。今は、「より健康に」「より楽しく」「より長生き」のできる時代です。おじいちゃんも、その他の男性も、古き時代の慣習にとらわれることなく、自分の健康を維持するうえに必要な「食」に関する知識と技術を、身につけてはいかがでしょうか。

宗像市社協
「社協だより」
第23号 平成元年10月1日

障害者の働く場づくり

運動はいかに

わかたけ共同作業所の現状から

全国に2、200カ所、約2万5千人の障害者が現在、共同作業所に通って働いていると聞かれています。

共同作業所は、「働きたくて働けない」、そんな障害者の働く場づくり運動として、障害者自身、また親たちの立ち上がりによって取り組まれたもの。筑後市のわかたけ共同作業所も同様の経過でつくられてきました。そこには様々な問題を抱える実態があります。

働く場を持たない障害者の働く場づくり運動として、その意義が驚くほどますます高まる中で、これらの問題をいかに解決していくかが課題といえます。

以下、わかたけ共同作業所で指導員をする山口さんの報告を。

現状と課題

現在、わかたけ共同作業所には、11人の仲間(通所者)が生きていく場、働く場として毎日通ってきています。

作業所ができる前までは、地域の中学校、または養護学校を卒業し、在宅でテレビが友達、という仲間もいました。現在では、働くことの喜びや自信を感じながら、仲間同士やその他多くの人々との関わりを持つ中で

表情や言葉も増えてきています。作業の中心は、企業の下請けで、単純作業が主、ボランティアの方々の手伝いを含めても、生産量が低いために毎月の給料も3、500円という少なさです。

企業からいまだく工賃は、すべて仲間の給料になりますが、同じ働く者としては頭痛の種でもあります。

このため、工賃の期待できるオリジナル(独自)製品づくりに取り組みたいと考えています。が、いろいろな条件があり、その開発に頭をひねっています。

作業場としては、現在市総合福祉センターの一室を借りて作業を行っていますが、始めは人数も少なく、広く感じられた作業室も、11人の仲間と2人の指導員、それに協力が入ると、ボランティアの人数が入ると、もう足の踏み場もないという状態です。

オリジナル製品づくりにして、も場所がなく、できない状態です。また、仲間の発作が起きた時の

静養場所もなく、みんなの作業する部屋に横になっていたりいう状態です。

運営資金の問題としては、今は国・県・市・共同募金・自己負担金が主な資金源ですが、公的補助金は仲間の程度や人数には関係なく低額で、2人の指導員の給料で精一杯といったところ

そのため、コンサートやバザーなどの事業収入や、賛助会員制の導入などによってなんとか運営しています。

あらゆる障害者の働くことのできる場として共同作業所の役割を考えると、人数の増や、重度者の入所に対応できる財政的な裏付けがほしいものです。

全国では献身的な運営委員会を中心に親・仲間・支援者・指導員とが一体となって様々な取り組みを繰り返してきています。

今後のわかたけ共同作業所運動を考えると、動ける運営委員会づくりと、多くの支援者との結びつきが、今後の運動を拓けるための重要な課題のように思っています。

言葉を書かないために、こちらの意志を押しつけがち。行動の中にかくれている意志を見極めたい。

——自閉症児の理解は——

多動やいろいろな特異な行動を示し、周囲の人々との関係づくりが難しいとされる自閉症児。市内にも数人、この障害を持つ子どもがいますが、そのいずれもが、家族や学校、地域社会の中での対応に問題を抱える実態があります。

今回は、そんな自閉症児を持つ母親に話を伺いました。

「言葉がほとんどなく、視線が合わない。いろいろなこだわりがあり、多動。自閉症です」と医師から告げられたのは子どもが四歳の時。

動き回る子どもを見ながら、一緒に遊ぼうとしても、気分が悪い時以外はのっぺりしない。子どもの興味に合わせて短かい時間でも楽しく過ごすように心がけました。

幼稚園、小学校では、すんなり入学(園)はできたものの、多動が理由で、親が何らかの形で関わらねばならない状況が長く続きました。

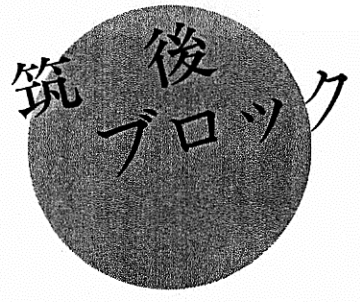
これまでの間、子どもの表面的な変化は見られぬものの、内面ではつきり変化してきました。小さい頃は親の意志が通じにくかったものの、ようやく幼稚園の頃にはこちらの意志がいくぶん通じるようになって関わりやすくなりました。最近では、自分の意志が出てきたようで、単にこちら本位の指示だけでは動かなくなってきました。

今思うことは、子どもの気持ちを尊重して、その意志を見極めたいと思っています。

日頃は言葉を書かないためにこちらの意志を押しつけてしまいがちですが、本人の何らかの形で出てきた意志を、何とか理解しようとするこちら側の姿勢が大事なような気がしています。

約束事や規則制は、はみだしてしまいがちな子どもですが、なるべくそれをダメと言わずに、おうように対応してほしい。時間をかけてつき合い方をみつけていってほしいと思います。

母親の思いを、子どもに関わる受け入れ側の方でいかに汲みとっていけるか、そこに課題があるように思えます。



重度身体障害者のホテル実現

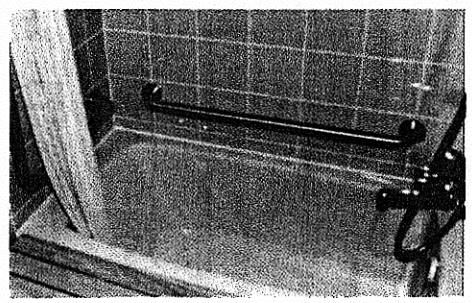
市内で初めて……萃香園

車いすの重度身体障害者が利用できるホテルが、久留米市内に初めて実現しました。すでに利用客の受け付けを始めています。

久留米市楠原町の萃香園ホテル(川村安正代表社員)は、昨年12月から6階にある広いリビングルームとベッドルームからなるツインの特別室の改造を行ってきました。宿泊者の邪魔にならないように工事を進めてきたため時間がかかり、やっとこのほど完成。車いすでも安心して宿泊できるよう特

別室にスロープをつけ、トイレ、ふろには、手すりを取り付けました。エレベーターにも障害者専用のスイッチを新設して、安全面の配慮も図っています。総費用は625万円。うちの市の助成金は300万円。

昨年10月、久留米市内で開かれた身障者大会で、障害者が泊れる施設がなかったのがきっかけとなり、市が「重度身体障害者宿泊施設整備補助事業」として市内のホテルや旅館業者に呼びかけ、同ホ



手すり付きバス

テルがこの趣旨に賛同して施設の改善に踏み切ったものです。

改造された特別室は普通なら1泊2万8000円ですが、障害者の利用は2人で1万4000円。1人なら7000円です。事前に予約が必要で障害者手帳をご持参ください。問い合わせは、35・5351。久留米市社協「くるめ福祉」



1月下旬に、「点訳パソコン」を導入します。これは、普通の文字を、目の不自由な人たちが使う「点字」に変えることができる機械。

ボランティア連絡協議会が、日本電気通信普及財団から寄贈を受けけるもので、県内では二番目の設置となります。

この点訳パソコンの導入は、これからの点訳図書、点訳文書づくりに相当の威力を発揮するものと思われれます。

一回機械に打ち込んだものは何回でも引き出せ、また何枚でも印刷ができる。さらにパソコン通信を使えば、全国で打ち込まれた文書が即座にこの筑後市で点字になって出てきます。

点字の広報づくり、電話帳づくり、また最近話題の点字受験問題で言われる教科書づくりなど、大いに期待されます。

ところで、点訳活動に取り組むむつみ会では、この体制づくりのために、今年4月から点字ボランティアの講習会を計画中です。

点字に興味のある人や、機械に強い人の参加をぜひお願いします。(陽)

新企画

**ねたきり老人を抱える
家族・介護者らのつどい**

「第1回ねたきり老人を抱える家族・介護者と支援者のつどい」(久留米市社会福祉協議会主催) 写真Ⅱが9月11日と同18日の2回、久留米市長門石1丁目の市総合福祉センターで開かれました。高齢化社会の急速な進行にともない、老人問題は他人ごとではなくなっています。市内には、ねたきり老人は約350人いますが、家族や介護者は、老人の介護に明け暮れ、地域社会から孤立しがちで、悩みを抱え込んでしまうケースが少なくありません。こうした家族らが集まり、話し合うことで悩みを解決する糸口をみいだそうと、初めて企画されました。

つどいには2回合わせて家族や介護者、ボランティア約100人が参加しました。会場には福祉機器が展示され、市社協や久留米保健所、市福祉課などの職員



久留米市社協「くるめ福祉」第53号 平成元年11月

たちが、ねたきり老人の介護の心構えや、参加者をモデルにしたの介護方法などを指導しました。このほか老人介護の映画や家族らの体験談の交換などがあり、初回は内容は充実していました。市社協では「つどい」の成果を踏まえて、家族らの組織化を推進していきたい」と話しています。

福祉憲章

私たちが住む大牟田を、さらに住みよい町にすることはすべての市民の願いです。私たちは、互いに支えあい福祉の心をはぐくみ、市民が連帯して、誰もが幸せに生活できる住みよい町をさすくため、この憲章を定めます。

- 一、思いやり、助けあいの心を大切にしましょう。
 - 一、みずからの責任を自覚し、福祉向上に努めましょう。
 - 一、ボランティア活動を高めましょう。
 - 一、みんなの協力と参加でよりよい地域をつくりましょう。
 - 一、みんなが等しく、幸せに暮らせる町にしましょう。
- 大牟田市社会福祉協議会
大牟田市社協
「社協だより」
第23号 平成元年1月30日

**歌声とさわやかな汗
久留米パラリンピック**

・身障者も健常者も一緒に汗を流す。第16回久留米パラリンピックⅡ写真Ⅱは体育の日10月10日、久留米総合スポーツセンター・陸上競技場(東楯原町)と市総合福祉会館(長門石1丁目)で開かれました。今年から身障者に限り、だれでも参加できるようになり、約100人が参加してさわやかな汗を流しました。同大会は、身障者の体力向上と親睦、地域の人たちとの交流と理解を深めようと、市と市身体障害者福祉協会などで構成された実行委員会が企画して行われました。陸上競技場では取組競争、パン食い競争、カネの音をたよりに走る音響走など盛りだくさんのプログラム。取組競争には健常者も自由参加して操作の難しさを体験しました。



久留米市社協「くるめ福祉」第53号 平成元年11月

人権週間・12月4日～10日

「人」として

すべての人間は生まれながら自由で尊厳と権利について平等である人間は理想と良心を授けられており同胞の精神をもって互いに行動しなければならない(世界人権宣言・第1条)

期間中の町の主な行事

- 映画会と講演
 - とき-12月5日(火) 午後1時30分～4時
 - ところ-改善センター
 - 映画会-木枯しの向こうに
 - 講演-「人権週間によせて」篠栗二の寺住職・桐生公俊氏
- 特設人権相談所
 - 人権にかかわるいろいろな問題や悩みなど、お困りの方は気軽にご相談ください。相談は無料です。
 - とき-12月7日(休) 午前10時～午後3時
 - ところ-役場第4会議室(2階)
 - 相談員-人権擁護委員

その「人権」を
見つめるために...

12
DEC.
1989
No. 172